

氏名	湯澤 直幹
ヨミガナ	ユザワ ナオキ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第335号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ジュゼッペ・ヴェルディ《リゴレット》—表題役を中心にその考察と演奏課題— 〈演奏〉 ジュゼッペ・ヴェルディ：《リゴレット》第1幕よりNo.4 Scena e Duetto “Pari siamo!” “Figlia!”—“Mio padre”(15分)ほか

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	菅 英三子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	永井 和子
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽研究科)	甲斐 栄次郎
(副査)	昭和音楽大学	教授	(音楽学部)	小畑 恒夫

(論文内容の要旨)

本論文研究の狙いは、オペラ《リゴレット》における、リゴレット像考察、演奏課題の研究を主軸として、ヴェルディにとって、又、バリトンと言う声種にとって、《リゴレット》がいかに特別な作品であるかを、生涯、音楽、台詞、声の取り扱いから考察し、《リゴレット》と言う作品の価値を「“音楽と劇の統合”の出発点となった作品である」とする結論へと導く事である。

ジュゼッペ・フォルトゥニーノ・フランチェスコ・ヴェルディは、1939年に《サン・ボニファーチョの伯爵オベルト》でこの世にオペラ作曲家としてその存在を示し、1893年に《ファルスタッフ》でオペラ作曲の最後を迎えるまでに、その生涯でオペラ作品を28作品残した。その作品の作風は時代とともに進化を遂げていった。

初期から中期までの作品は、イタリアオペラにおける、ベルカントオペラ時代の伝統的な形式に則って作曲がされていたが、時代が進むに連れ、作品中にその形式は見当たらなくなり、晩年の作品においては、全くそれを見ることはできない。ヴェルディは革新を求め、自らを駆り立てた。新しい革新の解決策として、台本作家に多くを求めたのである。

ヴェルディが、生涯をかけて目指していたのは、“音楽と演劇の統合”である。

これまでもヴェルディの《リゴレット》の研究は数多く行われてきたが、韻律、成立、原作台本、楽曲の簡単な研究が多く、バリトン歌手から見たリゴレット役の台詞、声の取り扱い、キャラクター研究においては、特出した研究はされていない。ヴェルディの声の取り扱いの研究においても、研究者による個人的見解の研究が多く見られ、男性低声歌手が普段の演奏研究から派生した研究は、役柄研究に留まっている。

第1章では、ジュゼッペ・ヴェルディの出生から《ナブコドーノゾル（ナブッコ）》の成功まで、成功から《リゴレット》までと、《リゴレット》初演までの生涯と作品について確認し、《リゴレット》が作曲されるまでの経緯を踏んだ上で、次章より《リゴレット》が“音楽と劇の統合”の出発点となった作品であることを考察して行く。

第2章では、第17作《リゴレット》までのヴェルディ・オペラ作品の音楽的特徴を扱った。

はじめに、バリトンとして注目する《リゴレット》の音楽的特徴に触れた。その結果を基に、バリトンとして注目する、作曲時期に隔たりのあるそれまでの作品、第3作《ナブコドーノゾル（ナブッコ）》、第6作《二人のフォスカリ》、第10作《マクベス》第15作《ルイーザ・ミッレル》、《リゴレット》の前作である第16作《スティッフエーリオ》の楽曲の中に《リゴレット》に至るまでの音楽的特徴を見出し、音

樂的特徴からみた《リゴレット》が、ベルカントオペラ時代の伝統的な形式から脱した形式に囚われない“音楽と劇の統合”へと発展を遂げて行った出発点であることを、キャラクター、声、と共に考察した。

第3章では、筆者が訳した《リゴレット》のリブレット対訳を用いて、第2章で考察したリゴレット役の楽曲の中からヴェルディが手紙に記した“Parola Scenica 劇的な台詞”であると判断できる台詞を取り上げ、ヴェルディがリゴレット役に与えた台詞効果を考察した。別冊付録 リブレット対訳と共に、拝読頂きたい。

第4章では、ヴェルディが求めた“バリトンの声”とは、一体どのような声であるかと問いを立て、筆者の声種でもあるバリトンと言う声の立場から考察した。又、ヴェルディが《リゴレット》の初演のタイトルロールに起用し、リゴレットを創唱したバリトン歌手フェリーチェ・ヴァレージの声を考察することにより、“リゴレットの声”を考察した。

第5章では、それまでの考察を踏まえ、《リゴレット》表題役像と、その演奏課題を、出生から《リゴレット》までの生涯の確認、《リゴレット》の音楽的特徴、台詞効果、声の取り扱いから考察をし、《リゴレット》と言う作品の価値を「音楽と劇の統合」の出発点となった作品であると結論付けた。

別冊付録においては、内容的、分量的な問題、読みやすさを考慮した点から、本文中に含めないのが妥当であると判断した、リブレット対訳を添付した。本文と照らし合わせながらご拝読頂きたい。

本研究から明確に得たリゴレット像と演奏課題を基に、最も望ましいリゴレットを提示していきけるように、この先の歌い手人生においても探求して行きたい。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、「ジュゼッペ・ヴェルディ《リゴレット》—表題役を中心にその考察と演奏課題—」と題した論文と、ヴェルディ作曲のオペラ《リゴレット》の抜粋という演奏によるものである。申請者湯澤直幹は、修士課程においても《リゴレット》の研究を中心に据えており、このオペラ、またこの役に向ける情熱は非常に強いものであることが窺える。

本論文は全5章から成り、第1章ではヴェルディの人生を辿りながら出生からオペラ《ナブッコ》(ナブッコ)までとそれ以降からオペラ《リゴレット》までを大きくまとめている。第2章では前述の二つのオペラの他、《二人のフォスカリ》、《マクベス》、《ルイーザ・ミッレル》、《ステイッフエーリオ》といったオペラ作品を取り上げ、それぞれの音楽的特徴を研究している。第3章では《リゴレット》の台詞に注目し、リゴレット役における台詞の効果について研究を行っている。第4章ではヴェルディが求めたバリトンの声について考察し、リゴレット役に求められるバリトンについて述べている。そして第5章がそれらの研究、考察から導き出した結論となっている。それぞれの章において執筆者の努力は感じられるものの、大枠から捉えただけで研究としては深まりに欠ける踏み込みの甘さが散見される。第1章においては大まかな俯瞰に終始しており、ヴェルディの人生を辿る意味が十分に活かされていない。第2章においてはそれぞれの作品についての研究が十分になされているとは言えず、各オペラ作品の楽曲紹介の域を出ていない。第3章においても独自の視点による意見が述べられているが、そこに至る経緯や論拠の検証が不十分であるため、説得力に欠ける。第4章も執筆者の主観、感想に終始している感は否めない。その結果、第5章の結論、研究のまとめは、論文として十分に説得力のあるものとはなっていない。研究論文としてはより視点を明確にし、論拠を示し、考察を深めて欲しい。しかし論文としての不足はあるものの、執筆するために多くの資料を読み、楽曲研究を行い、演奏家としての視点から作品、役柄を捉え直したことは、本研究における成果と言えよう。今後の更なる研究の進展を望みたい。

演奏は前述の通り、ヴェルディのオペラ《リゴレット》の抜粋である。大道具、小道具、衣装、照明等を用いて、10名の助演者と共に演奏を行った。稽古日程の調整、舞台設定の打ち合わせなど、本番までの様々な作業もあり、学位取得審査の演奏会までにかかなり消耗していたが、タイトルロールであるリゴレット役を最後まで歌い演じた。リゴレットの重要な場面をほぼ網羅したプログラムであり、体力的にも声の面からもかなり大変であることは予想されたが、破綻なく終えられたことは評価できる。しかしそれぞれ

の場面におけるリゴレットの内面を十分に表現し得ていたとは言い難い。歌い演じるということで満足せず、言葉や旋律に込められた心情、その内側に秘められているもの、その場の情景など、十分に役柄の内面性を表現できるよう、一層の精進を望みたい。

口頭試問の間では各審査委員から厳しい指摘がなされたが、申請者は自身の問題点をよく理解しており、謙虚にそれらの指摘を受け止め、真摯に向き合っていた。

審査の結果、演奏家の視点からの作品研究、役柄の演奏法研究として合格とすることとした。